

書評と紹介

谷口 康浩 著

『土偶と石棒
儀礼と社会ドメスティケーション』

中村 耕作

本書の構成

- 序章 儀礼考古学の現代的意義
 第一章 縄文時代の儀礼と社会
 第二章 石棒にみる儀礼行為とコンテクスト
 第三章 石棒と石皿―性交隠喩のコンテクスト―
 第四章 土偶破壊行為の再検討
 第五章 土偶と縄文土器
 第六章 保守的な土偶伝統―勝坂系土偶伝統と土器様式の関係―
 第七章 井戸尻・勝坂文化と二つの儀礼体系
 第八章 縄文文化のドメスティケーション
 終章 縄文文化と儀礼

序章が方法論、一章が主題となる各要素の概要、二・三章が石棒に関する各論、四～六章が土偶に関する各論、七～終章が土偶・石棒を含む儀礼をもとにした社会ドメスティケーションに関する議論で、このうち、一・四・七・八・終章は本書が初出、五章は大幅加筆である。三〇〇頁を越える重厚な研究書であり、しかも、全章の半分が初出である。著者は近年石棒については精力的に発言してきたが、土偶についての言及はあまりなされていなかった中で、本書は著者の新たな土偶論、そして新たに提示された「社会ドメスティケーション」という考え方が披露されたものとして注目される。

本書の概要

序章では、繰り返し実施される儀礼行為を考古学的に論じるには、モノ・行為・コンテクストが重要であると説く。遺構・遺物の「物質性」「物象化」や、使用痕跡、出土状況から儀礼のパターンを見出すのである。その上で、儀礼を論じる様々な立場のうち、「儀礼祭祀に関する考古資料を歴史的脈絡の中に位置づけて、社会・文化の中での意味や歴史的性

格を（私たち）すなわち研究者の視座から合理的に説明することである。考古資料の分析から客観的事実を裏証的に導き出すとともに、通文化比較や民族例からの類推も傍証としてつ（彼ら）がおこなった祭儀の歴史的意味を考えようとすると「立場を採ることを表明している（二二―四頁）。一章では本書全体で扱われる対象と主題を簡潔に紹介する。

二章・三章は、石棒の研究法と具体的な使用痕跡（行為）・出土状況（コンテクスト）の観察という各論である。形態・文様が複雑で焼き上げた段階で完成する土器と比べ、形態差が少なく様々な加工が繰り返される石棒に対する型式学的方法の限界を指摘し、実物観察から具体的に様々な痕跡を指摘する。また、墓域や住居内で石棒と石皿が共存する事例が多いことを指摘する。石皿との共存から性交隠喩が示唆されること、それが死に関わるものが多いこと、文化人類学の所説では「過渡（ヘネップ）・境界（リーチ）」状態への儀礼が重要であることなどから、死に際して生殖力を注ぎこみ、「死者に「祖先」という社会的人格を与える」という再生の思考を推定している（一一〇頁）。

四章～六章は土偶の各論で、四章では土偶に関わる行為を、使用痕跡（破損状態）から論じる。まず東日本を中心とした中期～晩期の百点以上の土偶が出土した三二遺跡六四二〇点を分析し、頭・腕・脚などの個別部位のみ遺存す

るものが八割、二つの部位が遺存するものが一割というデータを示し、一九九〇年の初出論文で行った分析を拡充した。また、三八遺跡七七七八点を対象とした接合率（接合した破片数・出土破片数）の分析でも、接合率の低さを示した。このような定量的分析に加え、出土状況の検討や、勝坂系土偶においては自然には割れにくい胴部の縦の割れなどを指摘し、総合的に破壊の人為性を指摘した。一方、大形や抽象度の高い土偶は状況が異なることから別の意味があったことを指摘している。

四章が地域・時期を横断した分析であったのに対し、五章・六章は中期中葉の中部高地～関東西部の井戸尻・勝坂文化を中心とする。既に石棒については三章で出土場所―死と共存遺物―性交というコンテクストが論じられたが、土偶については五章で土器との強い関係性というコンテクストが取り上げられる。まず、縄文土器自体、特に中期には象徴性が強調されることを指摘する。次いで、土偶と融合した深鉢や注口土器を紹介し、土偶自体が食に密接に関わると推定する。この観点から、消化管をイメージした土偶の孔が注目されている。また、土器との融合が中期以降であることから、それ以前の土偶との間に觀念の差異があったことも推定している。土偶や石棒はそれのだけではその意味を判断しがたいが、このようなコンテクストの中で解釈が本書の大きな

特徴であろう。六章は土偶の形態・系統論であり、中期初頭からの土偶の系統が、中期後葉に深鉢同様に小地域ごとに分化する一方、新たな土器様式との融合は見られず旧来の土偶の伝統が継承されること、地域によっては新たな土器様式との関係性が強まることを示す。一般に縄文時代の集団は土器様式をもとに仮設されることが多いが、土偶伝統の共有という視点の重要性が示されている。

七章は、章題のとおり、五・六章の主要な舞台である井戸尻・勝坂文化で土偶と共に発達した石棒を加え、二つの儀礼体系が同一の歴史的コンテクストの中で論じられる本書の核となる章である。まず、この時期に環状集落の分節構造が発達することを確認する。この文化の土偶の特徴として、生命力や活力の象徴としての女性的な神霊観念の造形イメージ、その観念の食物調理・貯蔵との密接な関係、破壊が儀礼の一部となっていることを指摘する。そして、これを中期農耕説と関連付け、「自然の摂理を支配する力への信仰と儀礼を伴って始めて文化の中に体系化された」「植物の生育を人為的にコントロールしようとする」「自然のドメスティケーション」と位置づける(二一〇頁)。他方、石棒については環状集落の分布と石棒の分布が重なるというデータを新たに示し、著者の持論であるこの時期に発達する環状集落の分節からうかがわれる分節的部族社会において必要とされる系譜

の認知に関わる祖先祭祀のシンボルとして新たに出現したのが石棒であると位置づける。また、東京都緑川東遺跡など中期末に石棒の遺棄例が多いのは、この時期の環状集落の解体に伴うものとする。最後に、井戸尻・勝坂文化に併行する東関東の阿玉台文化にはこうした土偶・石棒がほとんど見られないことから、固有の各地域文化ごとの検討の必要性を述べる。なお、「土偶」「石棒」という研究者側の概念を当時のカテゴリーと同一視できないことから、縄文全体に敷衍して解釈しようとするものではないという注意も払っている。

八章では、本書の副題にも掲げる「社会ドメスティケーション」を「社会的存在としての人間が自らの社会と生活世界を主体的に作り上げること」、「人間の社会化」、「セルフ・ドメスティケーション」とする(二三三頁)。それは、ルロワ・グーランの「時間と空間の馴化」、ホッダーの「*the Domestication of Europe*」、小林達雄の「縄文カレンダー」・「自然の社会化」などの先行研究に啓発されたものとし、縄文時代の儀礼や象徴の意味と作用力を通史的に整理している。即ち、早期・集石土坑にみられる共食を伴う集団的儀礼や確実な埋葬例にみる葬制の成立、前中期・前期の集団墓の造営と中期の環状集落の構造に見る血縁のシンボリズム、集落・住居や資源利用・生業分野などあらゆる分野へとあふれだすシンボリズム、後晩期・モニュメントなど長期継続の

儀礼拠点にみる儀礼文化の伝承・歴史認識、遠隔地での出土例にみる儀礼文化の広域化、儀礼的消費のための特殊生産の発達とその延長にある農耕受容、弥生移行期における儀礼の強化・再編などである。

さらに、続く終章では本書のまとめとして、以上の内容をふまえ、縄文を越えた先史研究全体に関わる論点として、①コミュニケーションとしての儀礼、②自然の社会化と観念技術、③血縁のシンボリズム(祖先祭祀と葬制)、④歴史認識の形成と伝統文化、⑤社会複雑化と儀礼祭祀の五つをあげる。最後に、社会的慣習・共同倫理・イデオロギーなど人間社会と生活世界のドメスティケーション、さらには超越的神霊世界とのコミュニケーションを成り立たせる「観念技術」として儀礼を位置づけ、こうした問題の再発見の意義を強調して本書が閉じられる。

「儀礼考古学」という視座と方向性

以下では、評者が注目した点について述べたい。評者は、著者に学び、同じような分野を研究していることから、自身に引き付けての記述になることをご了承いただきたい。

まず、序章と終章で主に論じられる「儀礼考古学」については、初出論文である「縄文時代の儀礼と社会」をテーマとした雑誌特集の総論(二〇一九年)に二回登場しているが、

その内容については説明されていなかった。但し、序章後半の一部は、「祭祀考古学は成り立つか」という論考(二〇一二年)を下敷きとしており、それは國學院大學で実施していた「祭祀考古学」をテーマとした共同研究に対し、「神道考古学」に源流をもつ八世紀以降の研究と縄文考古学では方法論も目的も大きく異なる同床異夢であると指摘し、具体的な方法を論じたものであった。もともと大場磐雄が提唱した「神道考古学」は、「神道に関する諸現象を考古学的に考究する」という対象を規定する形で定義されたものであった。「神道前期」として縄文時代も対象に含まれていたが、あえて言えば神道以前の比較対象という位置づけであった⁵⁾。その後、韓国竹幕洞遺跡で古墳時代祭祀遺跡と同じ石製模造品が出土したことなどもあり、日本列島に限定される「神道考古学」から「祭祀考古学」に拡大・名称変更したと評者は理解している⁶⁾。

これに対し、本書では、「儀礼」を「社会的慣習・規範として形式化した礼儀」、「祭祀」を「超自然的存在に対する宗教的観念とその絶対的な力への信仰を前提とし、それを行う人間の意識的側面を指す」と区別する(七頁)。儀礼には、現在で言えば、入学式・卒業式や国家儀礼などを含んでおり、祭祀よりも広い範囲とされている。儀礼考古学を名乗ることで、文献から祭祀対象・意図(意識的側面)を推測可能

な八世紀以降の研究に対して、先史考古学がとり得る道として、行為的側面や社会（関係性）を重視する方向性を示したかと思われる。

土偶と石棒の歴史的コンテクストへの位置づけ

終章では、本書のまとめとして、縄文に限らない先史時代の儀礼考古学の問題として五つの話題をあげていた。歴史認識を除く四項目それぞれで、まず文化人類学の理論や事例を紹介した上で、関連しそうな縄文の事例を紹介している。また、石棒の議論に際しても上記の通り通過儀礼論などを参照していた。こうした部分だけを見ると文化人類学理論を当て嵌めて解釈するのみという懸念が生じかねない。

その点で本書の土偶論は重要である。後述の通り、著者の一連の研究の基軸は、環状集落とその構成原理である分節的部族社会、社会統合のための祖先祭祀とそのシンボルである石棒であった。こうした一連の議論に、本書で新たに土偶の分析が加わることで、儀礼祭祀一般の社会的意義だけではなく、性格の異なる儀礼が特定の時期に並存することの意味が個別具体的に論じられた。

土偶や石棒は、小林達雄のいう「第二の道具」の代表例とされる。小林はその特徴を、形から機能が推察できないものと説明している。こうした中で、上記のように本書では、共

伴遺物・出土遺構から石棒の意味、土器との融合例から土偶の意味を推察した。また、その出現時期が大きく異なり、石棒の出現が中期に発達する環状集落の分節構造に伴うことから、その性格を位置づけている。従来、並存する様々な儀礼具に差を見出す場合、出自集団や性別集団など担い手の違いとして解釈する見解が多かったのに対し、本書では土偶・石棒それぞれの意味やその背景となるコンテクストの違いとして解釈し、歴史的視点から説明を試みた点が新鮮である。

歴史性と方向性

歴史的コンテクストという点をもう少し広げたい。本書は、『環状集落と縄文社会構造』（二〇〇五年、以下『環状集落と略記』）、『縄文文化起源論の再構築』（二〇一一年）、『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』（二〇一七年、以下『儀礼祭祀』と略記）に続く著者の四冊目の単著論集である。旧石器―縄文移行期を論じた二〇一一年の著書を除く、「社会」を冠する三冊は一連のものであり、まずはこれまでの軌跡を確認しておきたい。

『環状集落』では、環状集落の特徴として、中央に墓域、周囲に居住域といった同心円状の重帯構造と、それらが二大群などに分割される分節構造の存在が指摘されるとともに、環状集落は縄文時代に普遍的なものではなく、人口増加期に

出現するという偏在性が示され、集団墓を重視して、環状集落に人口密集期の社会秩序を維持する機能が推定された。その上で、分節構造の存在から中期社会が新進化主義人類学の「分節的部族社会」の段階にあったこと、環状集落解体後の後期以降には首長制社会を特徴づける特殊化・階層化がみられることが示された（二六二―二六四頁）。続いて、この『環状集落』の刊行と同じ二〇〇五年の「石棒の象徴的意味」（『儀礼祭祀』に再録）と翌年の「石棒と石皿」（本書三章）で、社会の維持のための石棒の意義が論じられるようになり、『儀礼祭祀』では、再葬に関する議論も加わって祖先祭祀がクローズアップされ、その発展過程がステージⅠ・集団墓造営と集団的祭儀の始まり（前期）、ステージⅡ・拠点形成と集団墓の分節化（中期）、ステージⅢ・モニュメント造営と祭儀・葬制の複雑化（後・晩期）、ステージⅣ・配石行為の衰退と再葬性の絶頂（縄文―弥生移行期）、ステージⅤ・方形周溝墓の受容と世帯単位の祭儀（弥生時代中期後半）の五段階に整理された（二六一―二六五頁）。『環状集落』では後・晩期社会への変化について経済的メカニズムの側面からの説明を重視し、『儀礼祭祀』では儀礼祭祀が社会複雑化を助長したメカニズムが重視されていたが、本書では儀礼やそれによって共有される宗教的観念・世界観念・祖先概念・同族意識・歴史認識（二六七頁）にもとづく社会統合の

原理と、その歴史的な生起が重視されたことは、前二著と異なる本書の大きな特徴といえよう。

本書において、中期にあらゆる分野にシンボリズムがあふれたことや、後期のモニュメントによって彼らの歴史認識が強化されるなどの指摘にみられるように、これら三冊はいずれも、縄文時代を時期別に大別し（特に中期以前と後期以降）、一つの方向性に沿って各期の特徴を説明するという視点でまとめられている。そのことは是非を判断するのは評者の任ではないが、ここでは、縄文時代を論じる際に変化は重視しない立場、あるいは歴史性を問題とせずにシンボリズムを論じるという立場とは異なる立場の表明であることを確認しておく。

著者は儀礼祭祀の発達によって複雑化が助長されたものと捉えている（本書二六三頁）。新進化主義の社会段階も上記のステージも、社会を大きく把握し、他の社会比較するための基準・枠組みとして重要な意味をもつことは評者も理解している。

しかし、これには異論もある。例えば、本書の主対象地域外である山陰地方を分析した山田康弘は複雑化は必然的なものではないとしている¹¹。また、鈴木徳雄は小形化する東北地方の注口土器（順列的な役割分掌性）という器種行為を伴う¹²）に対して、関東の安行Ⅰ式期に独自に大形の注口土器が

出現することに注目し、「列島内を一律に単一的な」発展として捉えるのではなく、共同性へと回帰する志向性をもつ地域社会の動向」への注意を指摘している。もつとも、一律的な発展史観に対しては著者自身も注意深く否定している。例えば後期の青森県風張(一)遺跡環状集落の評価(環状集落「一二頁)や勝坂文化に併行する土偶をほとんど持たない阿玉台文化の評価(本書二一八頁)など、個別に検討が必要であるという指摘である。

後進としては、大局的な把握と、複雑化への志向/同調しない志向などの多様性の双方に目を配る必要性を改めて感じるところである。

「観念技術」と「コントロール」

これまで「自然をコントロールする」のは弥生時代以降の思想として、「自然と共生」する縄文時代のイメージと対置されてきた感がある。こうした中で、本書で中期の植物栽培に対してこうした用語が用いられたことは、一見、縄文観を大きく覆したように見える。

本書の重要な点は、実務的な技術ではなくシンボリズムによって社会化を理解する視点である。対象に対してシンボリズムを適用する具体的な方法を小林達雄¹³⁾の用語を継承して「観念技術」と呼ぶ(二五九頁)。

(1) 小形の刀剣形石製品(精製石棒)と区別するため著者はこれまで「大形石棒」と呼んできたが、「大形」を冠することによって生じる誤解を避けるため、鳥居龍蔵による当初の定義に従った「石棒」に改められた(本書例言・二章参照)。両者を区別する必要は多くの研究者が同意しているにも関わらず、様々な呼称が提唱され統一を見ないのが現状である。

(2) ファン・ヘネップ『通過儀礼』(弘文堂、一九七七年)、リーチ『文化とコミュニケーション』(紀伊国屋書店、一九八一年)。

(3) 縄文研究において「再生」という解釈はしばしば登場するが、ここでの著者の用法は、甦り、生まれ変わりではなく、「祖先の世界」への再生の意味である。

(4) ルロワ・グーラン『身ぶりと言葉』(新潮社、一九七三年)、Hodder 1990『The Domestication of Europe』、小林達雄『日本原始美術大系1』(講談社、一九七七年)、同『縄文文化における資源の認知と利用』(講座地球に生きる3)雄山閣、一九九四年)。

(5) 大場磐雄「神道考古学の体系」(国体論纂 下)國學院大學、一九六三年)。

(6) 相山林継・菅谷文側・茂木雅博「座談会 山を考古学

本書では栽培を観念的に保証するために土偶というシンボルを作り・壊すという縄文人の行動自体が評価されるが、栽培ではなく仮に採集のみを考えた場合でも、縄文人の中に「大きいもの/美味しいもの/たくさん量の量を探りたい」という動機のもと、何らかの儀礼行為を行ったとすれば、それは自然に対して能動的に関与するという「意図」に基づいている。「コントロール」という語は少し強い印象を受けるが、意図に基づいてモノや行為という具体的なカタチを創り出す縄文人の積極的な姿勢を評価したものである。

なお、著者は『環状集落』の時点で既に藤森栄一の農耕論に言及していた(二〇五頁)。その後レプリカ法による種実圧痕研究の進展で具体的に栽培の状況が明らかになってきたことが本書七章につながったと評者は理解している。藤森の農耕論は、栽培の証拠ではなく、石皿などの石器のほか、土偶・顔面把手付土器などから地母神信仰の存在を推定することで成り立っており、藤森と著者は農耕・栽培を論じるにあたって観念的な部分を重視する点で共通しているが、「コントロール」という思考の方向性を示した点が大きな差異と言える。

(A5判、三一五頁、二〇二二年二月一〇日、六六〇〇円)

する」(『季刊考古学』第六三号、一九九八年)。

(7) 前掲註4、小林一九七七年文献ほか。

(8) この視点は、「石棒の象徴的意味」(二〇〇五年、『儀礼祭祀』に再録)で既に示している。

(9) サウヴィス『未開の社会組織』(弘文堂、一九七九年)。

(10) 例えば、前者は山本典幸が自らの「地域生活史」と対極にあるとした小林達雄の『縄文人の世界』の位置づけ、後者は大島直行のシンボリズム論があげられる。山本典幸『縄文時代の地域生活史』(ミュゼ、二〇〇〇年、特に二頁)、小林達雄『縄文人の世界』(朝日新聞社、一九九六年)、大島直行『月と蛇と縄文人』(国書刊行会、二〇一四年)。

(11) 山田康弘「つくられた縄文時代」(新潮社、二〇一五年、一七一―一七六頁)。同『縄文時代の歴史』(講談社、二〇一九年、三〇六頁)。山田は後著において、呪術具の多さを社会不安の大きさとして評価している。

(12) 鈴木徳雄「縄紋後期注口土器の形態形成と器種行為」(『地域考古学』五、二〇二〇年、六八頁)。

(13) 小林達雄「縄文土偶の観念技術」(『土偶研究の地平』勉誠社、一九九七年)。

(14) 藤森栄一『縄文農耕』(学生社、一九七〇年)。